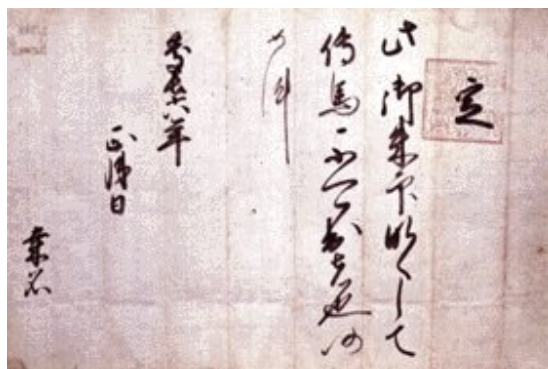


東海道桑名宿の発足

郷土史家 西 羽 晃

この1年間、明治150年にちなみ明治維新ころの桑名藩について書いてきましたが、150年も済みましたので、次のシリーズとして江戸時代の桑名の交通について暫く書きます。

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、江戸と京都を結ぶ通信制度を整備します。慶長6年正月に東海道の各地に写真のような「伝馬朱印状」を出しました。これが江戸時代の東海道宿駅制度の始まりです。



桑名宿に出された伝馬朱印状(物流博物館所蔵)

大きな朱印が押され「此の御朱印なくして伝馬を出してはいけない」と書いてあり、同じ朱印が押された伝馬手形を持参した者には、伝馬を提供してもよろしい意味です。伝馬とは宿場が用意する輸送用の馬です。このような朱印状を各宿場に出しておき、同じ朱印を押した伝馬手形を持参した公用の旅行者には無料の馬(もちろん馬子を付けて)を提供する義務を各宿場に負わせました。付属の文書では桑名宿では36匹の馬を常備し、その代償として桑名宿では屋敷地1800坪の税金を免除されました。この伝馬役を務めた人たちが住んだ所を伝馬町と言いました。

この時に朱印状を出された宿場は近隣では宮(熱田)、四日市、亀山、関、坂下でした。のちに石薬師、庄野が増えて東海道53次の宿場と言われます。

各宿場では朱印を照合するため、「伝馬朱印状」を大切に保管していましたが、現在では現物が残っているのは少なく、近隣では桑名と関だけで、宮や四日市には残っていません。桑名の「伝馬朱印状」(写真)は現在物流博物館(東京都港区高輪)に所蔵されています。

物流博物館は日本通運（日通）の関連施設であり、元は秋葉原にあった日通総合研究所の資料室に保管されていました。私は『日通社史』をたまたま見ていたら、桑名の「伝馬朱印状」の写真が掲載されていました。昭和 53（1978）年ころです。早速に手紙を出して問い合わせ、その後に秋葉原まで出かけて現物を見せてもらいました。

上記の「伝馬朱印状」以外にも「御伝馬の定」、「桑名宿助郷帖（享保 10 = 1725 年）」、「桑名宿助郷帖（天保 4 = 1833 年）」、「桑名藩勘定所達示（文政 9 = 1826 年）」などがありました。それらの文書を保管するための箱も残っていました。その箱は渋紙製の大きな葛籠で、背負うように紐が付いていました。最重要な文書ですから、火災などの災難時に非常持ち出しできるようになっているのです。

これらの資料が日通に入った経緯は不明ですが、昭和 30 年ころに水谷孝平さんから日通名古屋支店に寄贈されたようです。水谷孝平さんはどのような人なのか不詳です。ともかく全国的にも貴重な文書が無事に残っており、今後も保存されると思われ、有難いことです。